

短歌

岩松文彌

宇部市
(1898～1954)



【著作】
『岩松文彌作品集』
（昭31・岩松文彌先生歌碑建設委員会）
『岩松文弥歌集』
（昭38・岩松文弥先生歌集刊行会）

氏の遺稿「茂吉の生家」に記されている一節を引用させて頂く。

みちのくの谷川はたの杉黒し
茂吉が生まれし家の屋根見ゆ
この歌は島木赤彦の歌集『柿蔭集』の秋田ゆきの一首である。赤彦が汽車の窓から、あれが茂吉の生家だと車中の人に教えられて詠じた歌である。奥羽線の下り列車が上の山駅を出て五六分走ったと思うと須川と云う谷川を距て、茂吉の生家が見える。須川は最上川の一支流で、私の生まれた家から川を斜めに距てた対岸に茂吉の生家の土蔵の白壁がちらちら見えて居た。

年譜にあるように氏が宇部の地を踏んだのは昭和十一年（一九四六）の春のことだった。住まいは宇部市街とその沖の工場群の見おろせる処、宇部市西区島だった。その仮寓でこの一文は書かれている。昭和二十八年（一九五三）の四月頃か。

朝かげのみなきる空に縋なして
と歌ったのもその頃か。しかし、発想の原点は須川のほとりの我が家にあった昔日の思い出であつたらう。茂吉の家をいつも見ながら歌にあこがれた氏の想いが、宇部の高台で生活するようになって発酵したにちがいない。

ちようどその頃、私（筆者）は旧制宇部中学校最後の入学生として、国文法を教わったものだった。翌年制度改革で新制中学が生まれ、宇部市立神原中学校の校長として転出されたが、教育者としての顔の向こう側に、文人としての魂が脈打っていた。そしてその想いの向こうにあるのは茂吉の郷里であり、同時に自分の郷里上山温泉近くの須川のほとりの風景であり、人々の思いやりの深さに触れつつ育った少年時代の思い出であった。過酷な戦争の時代をくぐり抜けても、氏の文人精神は少しもゆるがなかった。氏のみたまは郷里山形県南村山郡金井村（現・山形市）の長秀寺にある。

（文・大野光生）



宇部市内を貫流する真締川畔に建つ文学碑「朝かげの」の歌が刻まれている



歌誌『あらつち』岩松文彌追悼号

関門海峡

つぎつぎと、大き艦隊すぎてゆく
この海峡のあかるかりけり
ふけしずむ 雨夜ひそけし。海峡を
汽笛ならして船の通れる
轉 任

會津より長門の浦にうつり住む
わびしき思ひは 人に告げがたし
海近き生活思へば 妻も子も
遠うつりつ、 たのしむらしき

『岩松文弥歌集』昭和12年の部より抜粋
※昭和12年は山口県赴任の年

岩松文彌作詞校歌校名
下関市 吉母小学校
宇部市 宇部市立高等学校
東岐波中学校 萩市
神原中学校 岩国市
厚東中学校 山陽小野田市
見初小学校 高千帆小学校
藤山小学校
船木中学校

岩松文彌 年譜

（提供・大野光生）

明治31（一八九八）年	大正8（一九一九）年	大正11（一九二二）年	大正14（一九二五）年	昭和5（一九三〇）年	昭和10（一九三三）年	昭和11（一九三六）年	昭和12（一九三七）年	昭和13（一九三八）年	昭和20（一九四五）年	昭和21（一九四六）年	昭和22（一九四七）年	昭和23（一九四八）年	昭和25（一九五〇）年	昭和27（一九五二）年	昭和28（一九五三）年	昭和29（一九五四）年	昭和29（一九五四）年
二二歳	二四歳	二七歳	三二歳	三七歳	三八歳	三九歳	四〇歳	四七歳	四八歳	四九歳	五〇歳	五二歳	五四歳	五五歳	五五歳	五五歳	五五歳
12月18日、山形県南村山郡金井村大字黒沢279番地の2（現・山形市）に生まれる。	3月、山形師範学校本科第一部卒業。師範時代『アララギ』に投稿。釈超空の選を受く。	山形県上山尋常小学校訓導に任ぜらる。	4月、山形県上山尋常小学校訓導を願いにより退職。	4月、山形県立長府高等学校教頭より山口県立宇部中学校教頭に就任。	4月、宇部市立神原中学校長に任ぜられる。同時に、宇部中央青年学校長。宇部市立臨時建築技術者養成所長を兼務。	9月、宇部市立夜間宇部中学校校長兼務。	4月、宇部市立夜間宇部中学校、宇部市立高等学校と校名変更、同校校長。	4月、『あらつち』創刊、主宰。	3月、神原中学校を退き、宇部市立高等学校校長専任となる。	8月、山口県定時制通信制教育振興会長より教育功労者として表彰される。	11月、山口県教育委員会より教育功労者として表彰される。	1月7日、午後10時10分、宇部市銀映座において脳出血のため急逝。	1月18日、NHK防府放送局「UGサロン」に於ける座談会「歌人岩松文彌を偲ぶ」（森本覚丹、山崎青鐘、日野巖、中野真琴）				